

流派と「茶道団体」を横断する： 若手社会人茶人と「伝統」の共存

矢 島 愛 子

第1章 はじめに

茶道が稽古事の一つとして普及した現代では、茶道を嗜むことは茶道教室や流派へ入門することと同義になった。茶道教室に通う以外の茶道の在り方としては、茶道修練者が数人規模の徒党を組んで茶会を催すことが一例として挙げられるだろう。徒党を組む茶道修練者はどの年代でも見受けられるが、その団体の代表者が20代から30代の場合、彼らは生きるための仕事を念頭に置き、社会人としてのキャリアを形成しながら、「お茶」の活動も両立している。ここでいう活動とは、茶道教室のように系統だった点前等の知識を教授することを主な目的とはしておらず、茶会を中心に、屋外を含む茶道教室の外で行われる行為全般を広く示す。この活動を行う母体を、便宜上「茶道団体」と定義する。彼らは茶室ではない場所で茶会を催し、茶道具ではない道具を積極的に茶会で用いる。そして教室で習う点前作法だけに囚われない、従来の茶道から逸脱しているように見える「お茶」をしている。

平成の茶道修練者に関する先行研究では、「人々がなぜ茶道教室に通うのか」という問いに答えることで「茶道（の価値）とは何か」を明らかにしようとしていた。例を挙げると、Corbett〔2009〕は調査対象を女性に限定し、人々が優美さ (gracefulness) を獲得するために茶道を学んでいるという結論を導いている¹⁾。本稿のインフォーマントの半数以上は男性であり、女性インフォーマントも本業を持ち働いているため、主に専業主婦が優美さを求めて茶道をするという結論を、本研究にそのまま当てはめることはできない。また、Sakaue〔2011〕は茶室という空間に着目し、達成感 (a sense of accomplishment) や、そこに存在するという感覚 (a strong sense of “being there”) は茶室という場に起因すると論を運んだ²⁾。しかし本稿は、議論を茶道教室の中に限定していない。茶道教室の外で茶会を主催している「茶道団体」の代表者による、茶室の外で行われる茶会での参与観察を試み、かつ、現役会社員もしくは会社員経験者を主要なインフォーマントとして定めている。というのも、日常の必要性から遠いからこそ茶道は文化資本であると結論づける多くの先行研究³⁾に反する形で、インフォーマントにとっての茶道が彼らの日常（仕事生活）と関わっているからである。

以上を踏まえ本稿では、「2010年代の若手社会人がなぜ、どのように『茶道団体』の活動を行うのか」を問うている。そして「茶道団体」の活動が「茶道（修練者）史にどう位置づけられるか」、一見「前衛的」に見える彼らが「どのように『伝統』や『流派』と共存しているのか」という3点に絞って論を進めている。方法論としては、20代から30代の会社

員や会社員経験者という条件に合致する「茶道団体」の代表者を中心とした茶道修練者へのインタビューと、彼らの催す茶会やワークショップでの参与観察を採用した。調査期間は2016年7月から2017年4月であり、主に東京都と京都府、鳥根県で行った。

第2章 「茶道団体」から見た今日の茶道の問題点

本稿における「茶道団体」という語は、その代表者や主宰者を中心とした、ごく少人数の集合を指す。団体の構成員を増やすこと自体は目的としていないため、団体発足時から現在まで、メンバーもその数も大きく変わっていない点が、会員を増やすことで勢力を増そうとする組織（例えば流派）とは大きく異なる。

以下では、本稿の主要なインフォーマントである「茶道団体」の代表者の発言を引用するが、プライバシー上の観点から全て仮名を使用し、必要のない際は彼らの活動場所や職業の詳細、正確な年齢なども明記しない。

一般的に茶会には、大別して少人数形式のものと、「大寄せの茶会」と呼ばれる大人数形式のものが存在する。後者は主に日本庭園や公園、美術展やイベント会場等で、置かれた長椅子等に座り抹茶を飲む形式で、赤い和傘の近くなどで行われているものがイメージされるだろう。一席あたりの客の人数が数十人単位になるため、亭主が客の目の前で茶を点てるのではなく、裏方で予め点てられた抹茶が流れ作業のように供される。これにより一度に茶を振る舞える人数が圧倒的に増えたため、現代の茶の湯はこの方式によって発展したといえる⁴⁾。

大寄せの茶会では事前予約が不要なことも多く、参加費も安価であり、茶道の心得のない人でも参加しやすいという特徴がある。その他の茶会と同様に、最も位の高い席には茶道経験者が座り、茶会で使用された茶道具や抹茶について形式的に問答することはあるが、それ以外の客は基本的に和菓子と抹茶を喫するだけでよい。

多くの茶会では定型的な流れが存在し、問答の際は、客側も主催者側も尋ねる／尋ねられる事柄は承知しているため、茶会ごとに多少の差はあれ、どうしても似たようなやりとりになる。数年前に「茶道団体」を興した翔太さん（20代後半、男性）は、茶会に参加しても「また次同じ会話だ」と先が読めてしまう、と不満を述べる。

最近どの茶会行っても同じなんですよ。大寄せ（の茶会に）行って、あれ、人（亭主）が変わったけど同じだなんて。じゃあこの人である必要くない？（略）僕がここに来てる意味ないなあってすごく思う。

不特定の客が集まる大多数に開かれた茶会にも「（亭主が）この人である必要」を求め、そこにお茶会に行く意味を期待していることが伺える。別の「茶道団体」を運営する大輔さん（30代後半、男性）も「毎週人が違ってても（茶会を）やりたいかっていうと、僕はそう思わ

ない」と発言しており、現行の茶会に新鮮さを感じないという点で翔太さんの感想に近似している。

同時に、大寄せの茶会を主催する側の意見も伺えた。会社員時代から「茶道団体」を主宰している達也さん（30代前半、男性）は、茶会に来た客に「感動した」と言われるときに楽しいと語り、それは「不特定じゃなくて特定の人」に言われたとき、と付け加えた。

筆者「不特定（の客）っていうのは、大寄せの茶会のような。」

達也さん「ああ、大寄せの茶会は社会貢献活動ですよ。昨日もしましたけど。大義として。知らん人に心は込められない。」

換言すると、達也さんは、自身が見知っている特定の客にお茶を振る舞うことに意味を見出している。不特定の人に感動してもらえらるることの重要度はそれよりも低く、茶道を広く楽しんでもらうという大義のために大寄せの茶会を開催していると述べている。客側として翔太さんが求めている「この人である必要」と、亭主側として達也さんが「特定の人」に向ける想い、これらの主張は重なっていると言えないだろうか。

加えて大輔さんは、道具や茶室を多少風変わりにしても、茶会という形式である限り「全体としては何も変わらない」と語る。「そろそろお茶会だけやってるのは飽きたよね」という発言からは、茶会の参加者側としてではなく、亭主側としてもつまらないと感じていることが伺える。そして、亭主が変わっても茶会の中身が変わらないようでは、客も一回参加して充分だと感じてしまい、二回目に繋がらないと話す。

今度のあの人（亭主）は何をしてくれるだろうって（客が）思ってくれないと。もう一回あの人のお茶、ってならないと（いけない）。

ここで、翔太さんや達也さんの発言に引き続き、「もう一回あの人のお茶」という、特定の誰かである必然性を求める言葉が登場する。紋切り型の茶会から逸脱することに亭主の個性と茶会の真価を見出すからこそ、「誰の」茶会であるかに主眼を置くのである。

第3章 「茶道団体」の実践

3.1. 参照点としての過去の偉人

第2章で触れたような問題意識から、インフォーマントの茶会は従来の茶道のような形式的な問答や茶会に留まらず、個人の趣向が滲み出たものとなっている。しかしその実は、従来の茶会を否定しているというより、むしろ「茶道」の要素を多分に内包しようとしていた。京都の鴨川沿いでお茶を振る舞う「鴨茶」（写真1）を見れば、茶道研究者の多くは容易に売茶翁⁵⁾を想起する。また、インフォーマントの茶会では「見立て」が散見されること

も特徴だ。茶道における「見立て」とは、本来茶道用の道具ではないものを茶道具として茶会に取り入れることを指す。千利休の師であったとされる武野紹鷗が、鉄瓶を水指（水を蓄えておくための器）として用いた例などが有名であるように、千利休以前から存在した「伝統」的な手法の一つだ。ある「茶道団体」では子供用のご飯茶碗を抹茶碗に見立てて井戸茶碗と呼ぶが、これは元来井戸茶碗が茶道用の茶碗ではなく、茶碗としての価値も低かったという、二つの事物の共通点を見出したからである（写真2）。

千利休が当時の陶芸家などに道具を作らせたことと、「茶道団体」の人々が現代作家に道具の製作を依頼することの共通点を指摘したのは、独自の「茶道団体」を興した智子さん（30代後半、女性）だった。現代作家に依頼した特注の茶道具で茶会をするのは現在では珍しいことではないが、それは利休が自身のプロデュースした道具で茶会をしたことに通ずると解釈する。自動車の中に畳空間を挿入した移動茶室（写真3）を手がけた「茶道団体」の代表者も、この茶室に合う茶碗を作家に依頼していた（写真4）。

ここで特筆すべきは、オーダーメイドの茶道具を製作してもらうことを「独創性」として評価するに留まらず、千利休も同じことをしていたと過去の偉人を根拠とする論の運び方である。これは千利休といった象徴的な存在が、それだけでまず権威を持つという茶道界の特性を活かしたものであり、オーダーメイドの茶道具の独創性に、歴史的な偉人の正統性を加える結果となっている。



写真1 自転車で詰んだ釜でお茶を振る舞う。

〔出典〕暮らす旅舎編『京都はお茶でできている』青幻舎、2016年、18頁。



写真2 現代の子供は知らないアニメキャラの図柄が、ミスプリントにより茶碗の縁ギリギリまで寄っている様を「佗び」と解釈する。(2017年1月8日筆者撮影)



写真3 移動茶室の後方(写真左)と側面(右)(2016年7月2日筆者撮影)



写真4 光の少ない移動茶室内でも映えるように、茶碗の内側はそれぞれ金色と銀色である。(2016年7月2日筆者撮影)

3.2. 近代数寄者との共通点

「茶道団体」の活動に正当性を加えるのは、千利休だけではない。まず背景として、茶道が女性のものになったのは戦後のことであり、それ以前は主に職を持つ男性のものであった⁶⁾。そうした過去の茶道修練者とその本職の関係について、「商人だったり武士だったり、みんな他の仕事をしつつお茶をやっていて、そこに本質があると思う」と述べたのは翔太さんである。稼業と「お茶」を両立させていた代表的な茶人としては、明治時代に活躍した近代数寄者⁷⁾が挙げられる。大輔さんも「それこそ（近代）数寄者の茶人たちってみんな実業家じゃないですか」と述べ、加えて智子さんが「江戸時代に（茶道が）習い事になってグダグダになった後、原三溪とかがかっこよくやってたあの時代が、もう一回来たピーク」と近代数寄者に強い関心を示していたように、茶道の教授者のような働き方ではなく、茶道以外の収入源を持ちながら茶道に取り組む姿勢に、インフォーマントは共感を覚えるようだ。

3.3. 「茶道団体」の目的

「茶道団体」の活動内容は、彼らを感じた現行の茶道の問題点を解消するべく、彼らなりの方法で改良を加えたものになっている。そこで、「茶道団体」を興した理由について尋ねると、最初は「伝統芸能の保護」という、流派側からも非常に受け入れられやすい目的で活動をしていたと翔太さんは話す。しかし「伝統芸能の保護」は「義務」を含意していると感じたようだ。「義務感から動く、なんか面白くない」として、「茶道団体」の方針を転換した。翔太さんの考える「保護」とは「みんなの80点を狙う（みんなに愛される）」ことであり、それは翔太さんの方向性とは異なるようだ。しかしここで議論されているのは、伝統芸能を「保護」して、茶道が人口に膾炙することが望ましいかではなく、翔太さん自身が面白いと感じるか否かである。本人が面白いと感じないために、「保護」というやり方を選択しないのだ。

翔太さんは「茶道団体」として、「保護」ではなく「森づくり（環境づくり）」がしたいと語った。環境をつくれれば、茶道のような芸事は自然に育っていくという意図である。茶道を人々に無理強いしていない姿勢は、「（環境があれば）動物って勝手に育つ」という言い回しにも表れている。翔太さんは万人受けする「お茶」をすると「僕が疲れる」として、自分たち「茶道団体」のする「お茶」を理解してくれる人だけ理解してくれたらいいと語る。賛同してくれる人が多ければ多いほど望ましいというより、活動に共鳴する人が、自主的に参加することに重きを置いているのだろう。活動の目的は何か、同様の質問を達也さんにも投げかけた。

達也さん「仲間づくりが一番かな。あと50年生きてとして、お茶をしながら楽しむのであれば、一緒に（茶道を）楽しめる人が必要で、楽しみ方を教える必要がある。」

筆者「仲間づくりというのは、茶道人口を増やすのとは、またちょっと違いますか？」

達也さん「確かに茶道人口を増やしたいのとは違う。みんなお茶に向いてるとは思っていない。向いてない人いっぱいいるだろうなって思う。無理やり押し付けるのも…。」

ここでも、翔太さんと同様に、茶道を万人に勧めてはいないことが伺える。

茶道教室や流派が、茶道を後世に残すべくより多くの人に茶道を広めようと努める一方で、「茶道団体」の目的は、——結果的に茶道が広まるという帰結は同じかもしれないが——正確には流派のそれとは異なっている。すなわち、茶道修練者を増やすことが流派の目的だとすると、「茶道団体」の活動の目的は、活動の理解者や一緒に楽しむ仲間を得ることである。仲間や客の人数の寡多より、「特定の誰か」にこだわる姿勢が、ここにも表れていると解釈できる。

3.4. 流派への想いの二重性：感謝と個人的思惑のアンビバレンス

一見流派の茶道と反しているように見える「茶道団体」であるが、どのインフォーマントも、常に流派への尊敬の念と感謝を述べていた。大輔さんは「(流派が) 海外の門弟もお茶を習える環境をつくったから、あれだけ海外でも茶道が認知されてるので。僕たちはそういう(流派が) 地ならしした上に、たまたま遊ぶ⁸⁾ チャンスがあっただけで、僕らがそれを切り拓いたわけではない」と、「茶道団体」の活動が「茶道」であるためには、流派や家元がまず存在しなければいけなかったと語る。また、「茶道団体」のメンバーであるレナさん(20代後半、女性)も、現行の茶道の問題点には触れつつ、茶道から受けた影響を全面的に受容していた。ある「茶道団体」の代表者である洋平さん(30代前半、男性)も、流派側が守ってきた仕組みやその積み重ねに対して、尊敬の念を持っていると語る一方、「自分は(流派とは) 別の方法で還元する」と意思を示す。流派が積み重ねてきた仕組みの中に、「どういう役割で参加していくか」を考えていると言葉を続けた。

自分の主張を述べる際であっても(もしくは主張するときだからこそ)、流派に対する感謝や尊敬の念は、枕詞のように発言の頭につく。アナキズムのような思想との違いは、ここにあるだろう。大輔さんもレナさんも洋平さんも、流派が作り上げた基盤がなければ、自分たちは活動できなかったと表現している。

同時に、茶道という律格の多い世界において、0から創り出すことよりも、既存の型を「エディット」することを好んだのは智子さんだった。こういった姿勢は、以下の大輔さんの発言にも見られる。

自分の流派を作りたいと思わないとか、(流派と) 違うことがしたいのかとかよく聞かれるんですけど。僕は裏千家という流派に所属しているし、裏千家の考え方がすごく好きなんです。その上で、今自分のできる表現は何かと考えている方が楽しいですね。

このように、流派の考え方が好きでも、そのまま「模倣する」「踏襲する」という発想にならないのが、「茶道団体」の代表者の特徴でもある。「自分のできる表現」といった、独自の「お茶」を追求する姿勢として、最も象徴的だったのは翔太さんである。自分の価値観や美意識といった理想が、千家（流派）の茶道と異なることをきっぱり明言していた。

他の人の茶室を真似しても意味はなくて、自分の価値観とか美意識ってなんだろう、自分のお茶ってなんだろうって考えると、別に千家のお茶じゃないんですよ。だから点前も自分で考えていいし、俺の茶室はこういう風になると（自分が決めていい）。だって自分の宇宙だから。

ただし翔太さん自身は、茶道を始めて以来現在も、千家に所属する師匠の元で稽古を続けている。茶道教室で習った内容の上に「自分のできる表現」を積み重ねていると大輔さんが考えているように、「自分のお茶」の希求と茶道教室での稽古は、本人たちにとっては背反するものではないのだろう⁹⁾。

3.5. 流派との共存を巡って

流派に感謝と尊敬の念を抱きつつも「茶道団体」という形式を取る理由は、現行の茶会に疑問を抱いていることや、千利休や近代数寄者とといった過去の偉人の模倣や踏襲ではなく「自分のお茶」を好む傾向から説明できるだろう。

個人としてではなく、まず「茶道団体」として活動するのは、個人対流派という対立構造を、団体名を使うことで緩和する目的もあった。このとき、「茶道団体」対流派という構造になる。茶人として無名の個人の活動が、急速に市井へと浸透し流派と並ぶようになるまでに、「茶道団体」という形式をとることが効果的であったと解釈できるだろう。あるインフォーマントの「お茶のお稽古をしてるだけだったら、なかなかやっぱり（メリットを）感じ取るのは難しい」といった発言は象徴的だが、流派に納めた金額以上の恩恵を受け取る方法が、教室の外で「お茶」をすることであったと考えられる。これはインフォーマントの活躍——端的に言うとも知名度と露出度——からも明らかである。例としては、彼らが催す茶会などが新聞やテレビ、雑誌やインターネット上の記事などに取り上げられることが挙げられる。そしてあらゆるメディア媒体で扱われるにつれ、インフォーマント本人が主催する茶会だけでなく、企業や個人からの依頼が増えていく。依頼の内容は茶会だけでなく、茶道関連のワークショップやセミナーから、日本文化関連のイベントの企画や運営まで多岐にわたる。

茶道界における知名度の尺度の一例として、名物と呼ばれる道具の値段は、それを所持している人間（茶人）に準じている。所持者の社会的評価が高いほど道具の価値が上がる訳だが、この「評価」とは人格や知性、創造性等を他人が判断したものである。つまり、道具に

値段をつけるための、普遍的で絶対的な価値体系が存在していない。平成時代に限らず、もとより茶道界は「評判」に基づく評価経済社会だったといえる。

情報過多の現代において稀少なのは、今や情報ではなく「注意 (Attention)¹⁰⁾」である。インフォーマントが自分の「お茶」をするメリットの一つが、評価や「Attention」であると捉えるのは容易だ。しかし、「茶道団体」が茶道とは縁遠い人々にも注目され、茶道の入り口となっているという点では、茶道人口の増加を望む流派側もその益を得ているといえる。そしてこうした「お茶」によって得た評価や注目によって、インフォーマントの仕事にも影響が及ぶようになる変遷を、次章で取り上げたい。

第4章 社会人かつ茶人であるということ

先行研究では主に専業主婦の茶道修練者が扱われており、彼女らは茶道教室で稽古をする他は、たまの茶会に客として参加するに留まっていた¹¹⁾。しかし、会社員には会社員の「お茶」をする理由があり、稽古に留まらず「茶道団体」にまで発展した理由は、「お茶」をしているとき以外の彼らの生活から浮かび上がる。

茶道を余暇的な趣味として扱ってきた先行研究¹²⁾（及び世間一般）の理解を超える形で、「なぜ／どのように茶道をするのか」という問いにインフォーマントが出した答えは、「仕事」と同程度以上の比重で「お茶」をすることであった。

本章では、会社員である／あったインフォーマントが、「茶道団体」の活動量を増やしたり、茶道教室を小規模から始めたりするところから、「お茶」が趣味以上の存在になる様相を描写していく。

4.1. 仕事内容が「お茶」に活用できる場合

千利休の一代前の人々が流行らせた「市中（市井）の山居」を、自らの慌ただしい仕事生活の中の「お茶」に重ねたのは、現在も大手企業で働く智子さんである。「市中（市井）の山居」とは、あえて大都会の中に田舎風の茶室を造り、都会にいることを忘れるようにするムーブメントである。働いている人々が、大都会で茶道をしていたことが粹であったと智子さんは語り、この忙しい現代で「お茶」をする美点を説いた。例えば、納期が短く締め切りに追われ、「普通のテンションでは生きていけない」労働環境には、戦国時代に武将の間で嗜まれたような「刹那的なお茶」が適していると智子さんは解釈している。智子さんの会社では、立ち上げた企画の幸先が悪いと、すぐ次の企画に移るようだ。しかしこういった仕事上の儚さから着想を得て、会社生活で起こったことを次の茶会のコンセプトへと昇華させている。

一方で、ヒットするまで回転を速めて企画し続けていくという方針を、「茶道団体」の運営に活かすインフォーマントもいた。IT企業に従事している大輔さんは、「茶道団体」の運営において、どういう茶会やイベントを提案していくか、常にアイデアを発信し続けている

と語る。「ダメならすぐ引く。行けそうだったらもっと突っ込む」といった、茶会の企画の引き際や攻め際は、智子さんの会社の話と酷似している。

方法は異なるが、二人とも会社での経験を「茶道団体」での活動に活かしているのは間違いない。彼らにとって「お茶」と本業は一続きになっており、「逆に両方あるからバランスが取れる」と話していたのは、仕事は仕事で充実している大輔さんである。大輔さんは本業で培った得意領域としてインターネットを例に挙げ、アナログな茶道界でホームページやSNSの運用に力を入れたことが、「茶道団体」の周知に役立ったと語る。こういった本業における知識は「お茶だけやってたら得られない」として、「必ず（仕事と「お茶」）両方の軸があった方がいい」と見解を述べる。

こうした「お茶」と仕事が影響し合っているという語りは、智子さんにも共通している。土日に家で過ごしているときではなく、「会社で、企画のアイデアが出ないとき」に抹茶を飲むと語っていた。稽古や茶会においてのみ茶道を楽しむ茶道教室の生徒と比較すると、インフォーマントは仕事と「お茶」の時間を、明確に区別していないと考えられる。

これは、茶道を非日常として楽しんでいた茶道修練者との最も顕著な違いの一つである。例えば松江城大茶会で出逢った茶道修練者は全員、茶道をする理由を「気分転換」という言葉で説明した。完全に仕事と茶道が分かれている場合にのみ茶道が「気分転換」になるため、仕事と茶道は完全に別世界であるということだ。また、松江市の茶道修練者からは、茶道をしたことで生活が豊かになったという語りがよく聞かれた。このような茶道教室に通うに留まる生徒の語りは、会社生活が「お茶」に活きたという大輔さんの発言と正反対である。

4.2. 「仕事しかない」ことの恐怖

前節までに見てきたように、20代から30代のインフォーマントは、会社生活だけでも十分に慌ただしい。その中で、なぜ始業前や終業後の時間にインターネット上で活動の告知をし、休日を茶会などに割り、より毎日を忙しくするのだろうか。インフォーマントの発言に共通しているのは、仕事や会社生活だけではなく、自分の時間を持ちたいという語りである。

年に1日休みがあるかないかという職場に新卒で入社した大輔さんは、「このままいったら、仕事しなくなると思った」と当時を振り返る。そこで「感性を磨こうと思って」、本や映画、音楽を楽しむ時間を捻出したことで、忙しい生活でも充実感を得たようだ。「仕事だけを持っているのではなくて、自分の仕事とは関係ないところで時間をちゃんと作れることが自分を豊かにする」と感じたのは、その最初の職場での経験が大きいだらう。

ここで興味深いのは、このままでは仕事しなくなると、という危機感である。職場や会社での地位が本人の価値を証明していた1960年代から80年代後半までは、会社という共同体の規範と上司に従う人こそ「理想の」労働者像であったが、90年代半ばより登場した「自

分のセンスとスタイル」を体現する「自立と自己責任を重視する」人物を尊重する言説は、2000年代でも残存している¹³⁾。仕事だけに傾倒することが望ましく受け取られなくなる中、「仕事しかなくなる」ことへの危機感については、食品メーカーに勤めるレナさんも語っていた。就業前に時間を取らなければ、一日中事務所か電車の中で過ごすことになり、太陽に当たる時間がないと話していた。また、自宅の近所には綺麗な場所も多いが、行く時間がないと不満を零す。

数年前まで設計事務所に勤めていた翔太さんも、会社員だった頃は「朝から晩まで会社の時間」であり、「自分の時間っていつかっていうと、土曜日とか日曜日とか、週2日しかない」と触れている。会社で働いている時間は、「自分の時間」に計上されないようだ。通勤ラッシュ時や帰宅時の電車内で、周りの会社員も自分も「みんな疲れて」いて「生きてる気がしない」と語り、それ以上会社にいたら駄目になると思い退職したと当時を振り返っている。朝から晩まで会社で働く人々を、生け簀で養殖されている魚に例えて、「自分の人生を生きてないような人達」と形容してもいた。

ある会社でデザイン関連業務に従事し、数年前に退職した達也さんも、「自分の人生」を生きるということに関して、似た言い回しをしている。他の「茶道団体」を意識するかどうかを話していた際に、「人に使ってる時間ない。(他人に) 関心持って見てたら、人の人生も生きなきゃいけない」と達也さんは語った。翔太さんと達也さんに共通しているのは、他の「茶道団体」や会社といった他人のために時間を割くことを忌避している点と、会社勤めを経て独立したという点である。

「自分らしい仕事」という言説が、仕事の中に自分のアイデンティティを見出すことを意味するならば、「自分の人生を生きること」に重点を置く二人が脱サラしたのは、会社の外にアイデンティティを見出した／見出そうとしたからであるといえる。言うなれば、会社の中に「自分の人生」はなかったということだ。これはフォイエルバッハやゲオルク・イエリネク、オットー・レーネルなどの法学者が、副業である文筆活動において本来の自己を表現していた事例と近似している¹⁴⁾。すなわち、自己表現は法律家や官僚にとっての「文筆活動と同様、生計を立てるための本職とは別の場で実践」されており、「現在の我々の生活からすれば、仕事と趣味という形態」を取っていると解釈できる¹⁵⁾。ただし、本稿の主要なインフォーマントの場合、時に「お茶」が「趣味」の域を超え、やがて「仕事」を侵食していく。以下に詳しく見ていこう。

4.3. 「どのようにお茶を続けるか」≒「どのように働くか」

現在「茶道団体」を運営する達也さんは、職場から徒歩圏内の茶道教室に通っていたため、平日の夜に茶道の稽古に向かい、その後また会社に戻って残業をしていたと会社員時代を振り返る。会社の同僚が晩御飯を食べに行くタイミングで、人に告げず稽古に行っていたと補足した。会社の飲み会もあまり参加しなかったと語り、茶道のための時間を捻出してい

た様子が伺える。その後、「会社員が向いていないことが分かりましたので」と会社を辞め、現在は収入源を「お茶」一本に絞った。会社員時代は「週1（の稽古）で、仕事とかの世俗の塵を落としていた」が、現在は「お茶」が日常になり、「茶禅一味みたい」な生活を送っていると話す。達也さんは会社員時代から、「茶道団体」の茶会を始めとした「お茶」の活動も進めていた。その頃から「お茶」専門になることを目標に準備していたのだろう。筆者との初対面のときも「もっと早く独立すればよかった」と笑っていた。

同じく脱サラした翔太さんも、「学生のときにお茶してるのと全然違う」と語る。社会人である彼らの問題意識は「時間がないから、どうやってこの限られた時間の中でお茶をするか、もしくはしないか」という翔太さんの言葉に集約できよう。すなわち、お茶を続けるか続けないかという問題に「続ける」と心を決めた後、新たに生起する問いは、「どうやってこの限られた時間の中でお茶をするか」なのである。「なぜ茶道をするのか」を探求し続けてきた茶道研究者の関心はさておき、インフォーマント自身にとっての問いは、「どうやってお茶を続けていくのか」であるといえよう。

大多数の茶道修練者にとっては、「どうやってお茶を続けていくのか」という問いは、「茶道教室に通い続けるか」という質問と大いに重なる。しかし「茶道団体」を主宰するインフォーマントにとってこの問いは、茶道教室での稽古以外で、どうやってお茶に取り組むかを自問するものである。「茶道団体」のような、教室内にとどまらない「お茶」をする人々の動機を探ることが本稿の目的の一つでもあるため、以下のセクションでは「稽古以外の場でも、どうやってお茶を続けていくのか」という議論を深めていきたい。それはそのまま、現代を生きる彼らの「お茶」の仕方だからである。

4.4. 仕事を侵食する「お茶」

以下のセクションからは、茶道教室外での「お茶」の続け方として考えられうる選択肢を、インフォーマントの実際の活動に沿って順に考察していく。各節の見出しは、「お茶」が単なる趣味ではなく、職業になっていくまでの時系列に沿っている。

その各段階の説明として、「兼業」「副業」「専業」という語句を使い分けている。「兼業」は、自らの茶道教室を開く前の段階を指している。茶道教室に通うだけでなく、本業（本稿では主に会社員）と同程度に「お茶」の活動に専念している人々がここに含まれる。「副業」は、自身が教授者となり茶道教室を持ちつつ、本業も続けている人々を指す。副業の状態が進行していくと、中には本業を退職する人々も見られる。従来では、茶道（のみ）を職業にすることは、茶道の教授者になることと同義であった。しかし本稿の主要なインフォーマントの特徴は、茶道教室で点前を教えるだけに留まらない点である。そのため本稿では、「専業」という語を、企業など第三者に依頼される茶会や、メディアの取材等、茶道教室以外にも収入源を確保している職業形態を示すものとして定義する。

4.4.1. 兼業という選択：会社員をしながら「お茶」の活動を続ける場合

複数のインフォーマントから聞かれた「やりたいこと」という言葉は、本稿では主に「お茶」を指している。これは職業選択の場面で頻出する語であり、自身の関心に基づいた「やりたいこと」に忠実であることこそが、職業選択の際に説得的な根拠になると若者は考えているのだ¹⁶⁾。大学時代の関心からものづくりの仕事に就いた洋平さんは、働き始めてからしばらくして、自身のイメージしていた仕事とのギャップに気づいたようだ。しかし転職することではなく、7～8年間その会社に勤めてきた。その仕事を続けるか検討し始めたのは、「お茶」がきっかけだと語る。仕事で図面を引いて物が完成するときと、茶道において直接手をかけて茶道具などを完成させるときの感動の違いなどを例に挙げ、仕事内容と「お茶での理想としての姿」が相反すると説明した。「一汁三菜で、水汲んでお湯を沸かす」という持続的な「お茶」での喜びと、使い捨ての消耗品を生産する会社での仕事との隔たりを、擦り合わせきれなかったと続ける。これは「やりたいこと」という言葉の反復により、職業選択が個人の内面にのみ関わる問題として描かれた結果、仮に外部要因があっても、純粋に個人の問題として事態が捉えられるようになったことと関連している¹⁷⁾。インフォーマントが抱える働き方への疑問は、個人の内面や気質から発生するものとして語られていた。

洋平さんのケースは、仕事と同時並行で続けてきた「茶道団体」の活動の比重が、仕事と同様かそれ以上になったためにバランスが保てなくなった一例だ。前述（4.1. 参照）の「お茶」が仕事に活きるという語りとは、相反する事象である。洋平さんはもう今の仕事を続けられないと考えつつも、以下のように語った。

小中高大とみんなストレートでパーンと上がってきて、ちゃんと一部上場の会社に入りました！というところの、社会的な路線を外れたことがないよね。（略）だけど綺麗なルートを歩いてきたから、（ルートから）パッと飛び出すこともできず、…もがいてるっていうのが現状の姿で。

本人はこれまで転職しなかった理由を、長い間「いい子に育つ環境」にいたからだと解釈している。「お茶」に（で）生きることは、彼の中で「綺麗なルート」を外れることを意味しているのだ。

4.4.2. 副業という選択：本業と並行して「お茶」も仕事にする場合

「お茶」と「仕事」のバランスが悪くなった場合、選択肢としては、転職だけでなく副業も考えられるだろう。本調査時は政府の「働き方改革」による副業の規制緩和が進められつつあったが、インフォーマントやそれ以上の世代では、副業を巡る状況がより厳しかったと考えられる。副業禁止の会社に勤めているために、表舞台に出てこない茶道修練者もいると大輔さんは語る。そういった人々が表立って出てこない理由について、大輔さんは「（その

茶道修練者たちも) お茶だけで生きていけないって分かってる。何に重きを置くか(の問題だ)」と語った。

本業と「お茶」にまつわる自己矛盾を割り切れず離職を考えていた洋平さんも、収入源を「お茶一本」に絞ることは「まだ早い」と言及していた。茶道の教授者として生活していくことに対して「そこまで希望を持っていない」と付け加える。

考えたんですよ。仕事辞めることも含めて。じゃあ今、どうやったらお茶をしながら食べていけるか。

このとき、先に触れた「どうやってお茶を続けていくのか」という問いが、「どうやったらお茶をしながら食べていけるか」という問いに変わって表出した。

勤務先が副業禁止であれば、会社を辞めるという決断も考えられる。そのような選択をした茶道修練者に対して、「どうやってお茶一本で生きるんだよ」という疑問を投げかけるインフォーマントもいた。実際に「お茶一本で生きる」ことを実現している茶道修練者もいるため、不可能ではないと前置きしつつも、懐疑的な意見も聞かれる。どうやって「お茶」(だけ)で生きるのかという問いは、まずもって生計を立てることを念頭に置かなくてはならない社会人と、切っても切れないものである。

ただし多くの茶道修練者は、会社員からいきなり茶道「専業」になるわけではない。副業可能な会社に勤めながら茶道教室を運営する大輔さんらのように、まずは会社員と茶道教室を並行して進めていくことが、副業の第一歩として考えられうる。

同時に、複数のインフォーマントが、「お茶」とは直接関係のない生業を、茶道教授者という職とはまた別に持つ利点に触れていた。茶道と関係のない本業があることによって、茶道から得られる収益に固執しない、自由で実験的な「お茶」が可能になると語っている。現在は個人事業主としての仕事と「お茶」を両立させている翔太さんの「職業茶人(本稿では主に茶道教授者を指す)ってそれ本質ですか」という発言には、生計を立てるための茶道は本質に反しているという強い主張がそのまま表れている。会社に所属しながら「茶道団体」を運営している大輔さんも「僕は別にお茶だけで生きようとは思わない」と語り、茶道の教授者のような「お茶」という軸しか持たない人々は、世間のトレンドに合わせて変化できていないと持論を展開する。「自分のお茶」にこだわりを持つ本稿のインフォーマントが茶道教授者になることを庶幾しないのは、妥当な流れだろう。

そのため、本来ならば茶道教授者専業になることを望まないはずのインフォーマントの茶道教室は、従来の教室の運営形態をそのまま踏襲するのではなく、現行の茶道教室の問題点を解決すべく改良されたものとなる。あるインフォーマントの教室では、月謝が「会費制」で、着物の着用義務はなく、正座も足が痛ければ崩せばいい、という雰囲気であると説明する。会費制とは、稽古に参加できた日ごとに稽古代を支払う制度のことだ。多くの茶道教室

に共通することだが、生徒が自己都合で教室をしばらく休む場合はもちろん、教授者が自身の師事する家元の茶事に参加/手伝いをする都合で1ヶ月丸々稽古が行われなくても、生徒は月謝を納め続けることになっている。これは茶道教室の月謝が、炭代や茶菓子代といった実費だけでなく、茶道教授者の固定給の意味合いを持っているからだ。

こうした独特のしきたりは、茶道修練者にとっては周知の事実である。現在茶道教室を運営している達也さんは、「今までは圧倒的に先生が強かったから、(生徒が)我慢してついできた」のだと語る。従来の先生主導の運営方法では、「僕らみたいな20代30代(の生徒)」が茶道を習い続けたいとは思わないと考え、稽古に参加する日時を毎回生徒自身が決められる制度を取っている。

4.4.3. 専業という選択：茶道の教授者以上の働き方をする場合

従来、「お茶」だけで生きる人々といえば、茶道の教授者や茶道具商、道具職人といった伝統的な職業に就く人々を意味していた。茶道そのものに関わる職に従事している人々は、茶道教室に通っている割合も高く、茶道教室を運営していることもとりわけ多い。しかし本稿に登場する「お茶」一本で生活している人々は、必ずしも茶道の教授者とイコールではない。それは先に述べた理由から、茶道「専業」と本稿が呼ぶ人々が、単に茶道教室の運営だけをしているわけではないからだ。むしろ教室運営以外の活動が、「専業」という在り方においては重要になる。

茶道教室以外の活動の代表例は、企業や個人から依頼される茶会である。先にも触れたが、茶道関連のワークショップやセミナー、日本文化関連のイベントの企画や運営もこれに含まれる。同時に、新聞やテレビ、インターネット上の記事など、あらゆるメディア媒体からの取材も活動の一つだ。これらは全て、現在のところは定期的に行なっているものではなく、第三者からの依頼の数によって、活動の頻度に波はある。また、主要なインフォーマントの多くは若手の陶芸作家との結びつきも強く、「作家さんの作品を預かって代理販売」することで、マージンを受け取ることもあると語った人もいた。茶道教室の運営で得られる月謝を固定給と考え、専業」という形態には、以上のような不定期の収入が含まれる。現役の会社員である別のインフォーマントも、第三者に茶会を依頼された場合などに発生する収益の話題に触れていたため、こうした不定期の収入は、副業という働き方をする人々にとっても重要となる。

4.5. 「働き方」と「自分の人生」の関連

本稿の主要なインフォーマントは、「茶道」が「やりたいこと」だからといって、茶道の教授者になることをすぐさま選択しない理由が複数ある。そして一度「茶道」に関係ない職に就いたからこそ生まれた、インフォーマント自身の得意分野や、忙しい生活の中にある「お茶」の美点といったものも、彼らを茶道の教授者一本ではない道へ向かわせた。決し

て、「やりたいこと」ができるなら茶道教授者という働き方でもいいという発想ではないのだ。働き方が固定されていた茶道界において、現代の働き方の多様性を反映するかのよう
に、「お茶」と（で）「仕事」をする方途を示しているのが本稿のインフォーマントである。

本章で明示したように、インフォーマントは「仕事だけ」になる危機感を抱き、「自分の時間」や「自分の人生」を希求していた。会社や他人に時間を奪われずに「自分の時間」を持つことへの強いこだわりは、本稿のインフォーマントに少なからず共通している。そして彼らは、「やりたいこと」をしながら生活していくこと（＝「自分の人生」を生きること）が理想の働き方であるという認識も共有していた。

「茶道団体」の代表者の語りでは、本来なら自己の介入する余地の無さそうな「伝統」について話していても、「私」という語が頻出した。このような「自分中心性」は、「自分の時間／人生」への渴望から来るものだったと換言されうる。「伝統」を踏襲して先人の模倣を目指す茶道教授者という働き方では、「自分の人生」を生きている心地がしないのだろう。だからこそ彼らの「お茶」は、「茶道団体」といった型がまだ未完成の、自分たちが中心と
なってこれから創り上げる形態でなくてはならなかった。

一つ追記しなければならないのは、「お茶」そのものを本業にすることだけが、「自分の人生」を生きる唯一の方法ではないということだ。仕事の中に「お茶」を介在させ、「お茶」と仕事の比重を考える過程そのものが、「自分の人生」を生きることなのである。全員が全員「お茶」の比重を100パーセントにするのではなく、その比重がインフォーマントによって異なるからこそ、彼ら一人ひとりが「自分の人生」を生きているという感覚を得られる。

第5章 結びにかえて

第3章（3.4.参照）で言及したように、インフォーマントは流派への感謝や尊敬の念を述べ、反抗する意図はないと繰り返していた。実際に、彼らの目的は流派の否定ではなく、「自分のお茶」をすることだと考えられる。「仲間づくり」や「自分の人生を生きる」といったインフォーマントの真の目的に鑑みても、彼らが「自分のお茶」ができている限りは、流派に反発する理由はないといえる。

しかし、インフォーマントは茶道教室以外の「お茶」の在り方を示し、人々に「こんなお茶があるのか」と思わせたと同程度に、「これは（私が茶道教室で習った）お茶ではない」という反応を引き起こした。この「これはお茶ではない」という言葉が批判的な意味を持つこと自体が、まずもって疑問視されるべきである。

「お茶とは何か」という哲学的な問いは、「あれはお茶」で、「これはお茶ではない」と判断するためのものである。すなわち、「これはお茶ではない」という言葉が批判的な意味を持つのは、「お茶とは何か」という問いの元で茶道をしている場合に限られる。確かに、平成前期の茶道が「勉強」と呼ばれていたように¹⁸⁾、茶道修練者個人が「お茶とは何か」を理解／判断できるようになることが、茶道を「勉強」することであり、教養を意味したのが茶

道界であった。茶道を「勉強」することで、審美眼も養われ、善し悪しの判断を下せるようになる (judgmental になる) のだろう。

しかし本稿では、「お茶とは何か」を議論する意図がないため、「本人がお茶と呼んでいるものがお茶である」という立場をとった。筆者の理解では、人が「勉強」するのは、他人や他人の思考を否定しなくてもいいと思えるようになるためだ。「否定的であること」は、造詣が深いこととは全く異なる。造詣が深く、世界の広さを知っている人であれば、その分だけより多くの事物を認められる。ここでいう「認める」とは、必ずしも称賛や同意をすることではなく、否定する必要性がないと気づくことだ。

本稿のインフォーマントのように、忙しい日常の真っ只中に「お茶」を取り入れ、平日の仕事後に稽古に通い、残業の合間に茶を点て、茶会などの活動に土日費やす人々のする「お茶」の是非を問うなど、甚だ見当違いの非力な問いである。理解を超えたものへの嫌悪感そのものは了解できる。しかし本当に茶道を後世に残したいのであれば、必要なのは、この世界に実際に起こっている「お茶」を肯定することである。

以上を踏まえ、今後問われるのは、誰かの「お茶」の可否ではなく、「ではあなたはどんなお茶をするのか」であろう。教授者に教わった通りに稽古と免状を積み重ね、自らも教授者になり、教わった通りに自分の生徒にも教える——その整然とした流れの上に茶道はあったが、今や「お茶」は受け身で楽しむものではなくなりつつある。ここでいう積極性、能動性とは、数多くの習い事の中から茶道を選んだことに現れているのではなく、茶道教室そのものから飛び出していることにある。茶道を余暇としてのみ扱い、人々が茶道教室に通い始める理由に主体性を見ていた、過去の茶道修練者研究を反駁し、新たな論点を投じることができていれば幸いである。

註

- 1) Rebecca Corbett, "Learning to be Graceful: Tea in Early Modern Guides for Women's Edification," *Japanese Studies*, 29.1, (2009), pp. 81-94.
- 2) Mari Sakaue & Denise Reid, "Making Tea in Place: Experiences of Women Engaged in a Japanese Tea Ceremony," *Journal of Occupational Science*, 19.3, Taylor and Francis Group, (2011), pp. 1-9.
- 3) 茶道と文化資本の関係については、茶道が象徴資本と文化資本を修練者に与え、それが女性修練者のエンパワーメントに繋がっているとの叙述や〔加藤恵津子『〈お茶〉はなぜ女のものになったか』紀伊国屋書店、2004年〕、文化資本としての茶道が社会階層を決定づけているという議論でも触れられている〔大屋幸恵「現代茶道修練者の意識 その社会学的考察」『茶道文化論 茶道学体系一』淡交社、1999年〕。教室に通ってればある一定の社会的評価を得られる——実際に資本を得ているかに関わらず、文化的な威信を得ていると思われる——ことを期待し、象徴資本を得るためだけに茶道教室に通う修練者の具体例もある〔Kaeko Chiba, *Japanese Women, Class and The Tea Ceremony: The Voices of Tea Practitioners in Northern Japan*, (London: Routledge, 2011)〕。また、茶道のような芸術はエリート層と結びついている (と考えられている) として、適切な社会に参入することを望む全ての女性にとって、不可欠な知識であるとも言及されている〔Beverly

- Skeggs, “Context and Background,” *The Sociological Review*, 52, (2004), pp. 19–34.]. より直接的に言うとは、非優勢的な集団にとって、象徴文化資本を得るために茶道をすることには、より階層の高い女性と平衡する目的がある [Corbett, 前掲, pp. 91] とも表現できるだろう。
- 4) 鈴木皓詞『近代茶人たちの茶会』淡交社、2000年。
 - 5) 売茶翁とは、江戸時代に鴨川周辺で煎茶席を設け、煎茶の販売をしていた人物である。茶道具を両端にぶら下げた棒を担ぎ売り歩くスタイルは、「茶道団体」の活動にも見られた移動式の茶会に通ずる。煎茶の販売と言っても、「ただのみも勝手」と、金銭にはこだわっていなかったようだ [小川後楽『煎茶入門』保育社、1976年、114頁]。現代で「鴨茶」をする人々はみな、客から投げ銭や喜捨を受け取るに留まっており、茶の販売はしていない点も類似している。
 - 6) 加藤、前掲。
 - 7) 明治維新を機にそれまで茶道界を支えていた大名や豪商が消え、その後の茶道を担った財政界人をまとめて「近代教寄者」と呼ぶ。代表例としては、井上世外や、安田松翁、藤田香雪、智子さんが触れている原三溪などが挙げられる。[谷端昭夫『茶の湯人物誌』淡交社、2012年]
 - 8) 自身の「茶道団体」の活動を「(こっちは) 遊び」と表現したのは、大輔さんだけであった。これは自身の運営する茶道教室と「茶道団体」での活動を区別する文脈であった。彼の語りを整理すると、仕事と「お茶」に隔たりはないが、茶道と「お茶」には区分が必要だということだろう。
 - 9) 茶道の教授者になる意思がないと明言したのも翔太さんだけであるため、そこは「自分のお茶」と千家の茶道が反するという点で一貫している。生徒として茶道教室で学びはするが、自分が教授者になってその内容を教えることはしないということだろう。
 - 10) マラツツイ、C、柱本元彦訳『資本と言語——ニューエコノミーのサイクルと危機』人文書院、2010年。
 - 11) Kaeko Chiba、前掲。
 - 12) 主に江戸時代の茶道論が、楽しさ優位の「趣味論」として趣味という近代的な言葉で括られたのが、茶道が趣味と捉えられた最初の瞬間であると考えられる [熊倉功夫「茶道論の系譜」『茶道文化論 茶道学体系一』淡交社、1999年]。茶道は戦後に稽古事として一ジャンルを確立するが [加藤、前掲]、稽古事も余暇時間内の活動と捉えられるため、現代まで茶道は広く余暇的な活動と見なされている。
 - 13) 前田崇「戦後日本における「正しい」社会人像の変容：朝日新聞記事の「社会人」言説を手がかりに」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』第57号、2005年、71–72頁。
 - 14) 西村稔『文士と官僚』木鐸社、1998年、10–11頁。
 - 15) 宮本直美『教養の歴史社会学：ドイツ市民社会と音楽』岩波書店、2006年、76頁。
 - 16) 久木元真吾「「やりたいこと」という論理」『ソシオロジ』第48号(2)、社会学研究会、2003年、78頁。
 - 17) 荻谷剛彦『階層化日本と教育危機』有信堂、2001年、185頁。
 - 18) 加藤（前掲）と Barbara Lynne Rowland Mori, “The Traditional Arts as Leisure Activities for Contemporary Japanese Women,” *Re-imagining Japanese women*. Edit. Anne E. Imamura. (Berkeley, California: University of California Press, 1996).